

谷 馨著 万葉武蔵野紀行 寸評

竹内金次郎

万葉地理に興味をもっているわたくしは、ある時は一人で、またある時は上代文学会の人たちと一緒に、かなり方々に出歩いているつもりである。北は陸奥山から、南は筑紫の海の果まで、全国いたるところの万葉遺蹟を巡っている。この夏は山陰地方に二度目の旅を企て、人麻呂の臨終の地と伝えられる鴨山をもう一度調べようとしている。それなのに「灯台本暗し」のたとえのように、自分が生れ、しかも現に住んでいる関東地方の万葉地理に暗いのは一体どうしたことかと、われながら不思議に思うことがある。かつては今井福治郎氏に「万葉東国紀行」があり、今また谷馨氏の「万葉武蔵野紀行」が世に出た。お前は一体何をしているかどやされたような気がして、早速一本取寄せて読了し、非常に興味と実益を得たので、受持の学生たちにも参考書として推薦したことであつた。

本書は、小埜沼・埜玉の津・曝井・秩父

吉田・武州御嶽・多摩河・多摩の横山・於保屋が原など東歌に現われている武蔵の国の万葉歌枕を実地踏査した紀行文九篇と、「武蔵野古寺」と題して、国分寺と深大寺に遊んだ折の短歌三十数首と、「うけらが花」「むらさきなど」と題した二篇の植物記とから成っている。しかし、何といつても重点は第一部の紀行文におかれているのはいうまでもなく、著者はその初めの部に「遺蹟を調査して、新見を得ようとか、説を決定しようとか、そうした穿鑿を主な目的とはしない我儘な性情」からの紀行であるといつていられるが、実際読んでみると、どうしてなかなかさような手ぬるいものではなく、予め現地と緊密な連絡をとる、それに関する資料を博搜してメモをとり、現地に着いてからは、その土地の研究家や、あるいは資料の収蔵家について直接たずねなど、著者の周到な学者的良心が随所に表われている。その結果、「於保屋が

原」の有力な候補地を設定したり、府中の六所明神所蔵の僧春登著す所の未刊校本「葉裏」の一部を復刻したりするが如き、新らしい業績をあげている。のみならず、防人の制度や階級、古代卜占の習俗などについては、かなり詳しい考証論断がなされ、著者の学問的情熱と、その学識の一斑を思わせるものがある。しかし、その反面、本書を単なる紀行文として読もうとする一般の人々には、やや抵抗を感じるかも知れない。だがそうした際にも、挿入の字点や地図など七十数葉におよぶ図版が、どれだけ読者の理解を助け、むずかしさを救ってくれるかはかり知れない。

なお十七頁から十八頁に移る際に、錯簡があり、また時々誤植も見受けられるが、こうしたことは大行の前の細理と見るべきであらう。

ともあれ、わたくしは、いつの日か本書に導かれて、武蔵野の山河を跋涉してみたいと心ひそかに楽しんでゐる。

—日本大学教授—

(万江書院・三五〇円)